

## 29年の時を越えて

飯田一彦

みずほコーポレート銀行 企業調査部 参事役

「学外からの眼」というコラムではありますが、正直申しまして私には「今」の筑波大学のことがよく見えておりません。それは恐らく、今の仕事が企業の価値や事業性の分析を主とする金融業であって、筑波大学時代の専攻である東洋史とは距離が遠いからなのかもしれません。その一方、30年近く前に筑波大学で学んだこと、経験したことが、今の自分を支えている重要な土台であることも確かです。そこで本稿では少し視線を変えて、「今」の自分の眼で見たとき、「昔」の筑波大学はどのように見えるのかを述べてみたいと思います。現役筑波大生諸君にとって、筑波大学を再認識する何らかのヒントになれば幸いです。

### 1. 得がたい仲間達

学校でも職場でも同じだと思うのですが、良い教科書があり良い先生もいれば、理論やノウハウは学べます。しかし実際にそれを

使ってどのように現実を分析し、どう評価・判断するのかという肝心なことは、なかなか学べないものです。一般論で言えば、大学のゼミのような場がこの領域をカバーするのでしょうか、筑波大学は開学当初からこれを設けていませんでした。

私達は、その肝心なことを学ぶため、方法論やアイデアを議論出来る仲間を見つけ出し、とにかく一緒に色々と試行錯誤してみるほかなかったのです。やっと見つけた仲間は皆若く、暗中模索でやっていた内容は、今から思えば、幼く未熟なレベルでしたが、少なくともあの限られた環境の下で、自分の問題意識に対して能動的に解答を得ようと努力し、結果として身についた行動ポリシーのようなものは、大切な財産となりました。そしてそれは今の私の仕事、企業分析という領域でも立派に役立っているように思います。

## 2. 手作りの大学

私が筑波大学に入学した1977年は、建学後初めて大学の一年生から四年生までが揃った年であり、新一年生は、「最後のパイオニア」と呼ばれました。キャンパスでは、まだあちこちの建物が建設途上でした。学生のアルバイトといえば、建設作業補助とか、研究棟・宿舎への家具搬入といった肉体労働がけっこうあり、私も第三学群研究棟の下水道敷設、一の矢女子寮のベッド搬入、大学図書館の図書搬入・整理等をやらせて頂きました。そういう意味からも、筑波大学は、まさしく「自分の手」で作った大学、という思いがあります。

各種のサークルや勉強会なども雨後のたけのこのように次々と生まれました。サークルは、一年生だろうと二年生だろうと、作った人が歴史に残る栄光の初代代表です。私が入った「中国文化研究会」というサークルは、日本語学を専攻する人文学類の二年生、Y先輩（現・筑波大学大学院人文社会科学研究科 助教授）が二代目の代表でした。

当時、私たち東洋史専攻の学生は、古代中国の資料を読む「漢文講読」が必修科目でしたが、ある時から私はかかる資料をいわゆる「漢文」として読むのではなく、現代中国語を使って読んだ方が、正確に内容を理解できるのではないか、と考え始めま

した。ところが当時の筑波の東洋史では、そんなことをやっている人が研究者にも学生にもいません。そんな時、「君が始めたらいいじゃないか。僕も漢文を現代中国語で読んでみたいので、一緒に講読会をやらなにか。」と声をかけてくださったのがY先輩だったのです。

その講読会は、早速平砂学生宿舎のY先輩の部屋で、週に一回のペースで始まりました。しかし、思えば大胆なことを始めたものです。中国語はY先輩も私も専門ではありません。辞書と首っ引きになりながら、一回二時間やってわずか数行しか進まないこともありました。また、自分達の理解が本当に正しいかどうか今一つ判然としません。そこで現代中国語を専門とする大学院生や講師の方も時々お招きし、教えを請いながらなんとかやりくりしました。そのうちに、読解力の方もだんだんついてゆきましたし、参加者の方も、うわさを聞きつけた学生があとから加わって、最後は6名くらいになったと思います。

筑波大学のサークル活動は、多かれ少なかれほとんどがこんな形で運営されていました。黙って待っていても、誰も何も与えてくれません。自分でまず何かを始めてみることの大切さをたくさんの学生が実感したことと思います。

### 3. 夜通しのフリーディスカッション

上述の講読会は、大体夜七時頃から始まるのですが、そろそろ終わりという頃になると、たいていY先輩の知り合いが乱入し、安い焼酎などをチビチビやる飲み会に変わります。乱入してくる学生には、自然学類や社会学類など、漢文とは全く無縁の学生もいましたし、時には他大学在籍のY先輩の友人も来られました。この人々に特徴的だったのは、アグレッシブなY先輩の知り合いだけあって、いずれ劣らぬ話好き、議論好きが多かったことです。政治・経済、哲学、文学論、或いは恋愛論など、様々なテーマについて、肩のこらないフリーディスカッションを楽しみました。時には口角泡を飛ばして徹底的にやりあうこともあり、冬場、宿舎の集中暖房が止まる10時を過ぎてなお、毛布にくるまって延々と議論を続けたことも一回や二回ではありません。

ふり返ってみれば、筑波大学ほど学生が専攻や専門を超えて交流し、議論のできる条件の整った大学はありません。空間はキャンパスにも宿舎にもあり余るほどありましたし、時間も終電を気にすることなく、朝までたっぷり使えました。学生自らが能動的に議論の場を持つとする限り、実りの多い学生生活を送れたのではないのでしょうか。私の場合、卒論のテーマとして選んだ中国の土地改革史は、残っている文献資

料の極めて少ない分野でしたので、分析のフレームワークをどう固めるかが重要でした。決して胸をはれるほど出来のいい卒論にはなりませんでしたが、このフレームワーク作りにおいて、政治学、社会学や民俗学等の研究者・学生の方々と交流・議論させて頂いたことが、結果的に有形無形のヒントを多く与えてくれたように思います。

私の今の仕事である企業分析でもディスカッションは重要な作業工程のひとつです。一つ一つの企業アナリシスレポートは、社内外のたくさんの人との議論を経て、初めて完成されます。決して一人のアナリストが、自分一人の知見だけを頼りに一気呵成に書き上げるというものではありません。筑波で楽しんだフリーディスカッションは、今の仕事にとって、初歩的なトレーニングにもなったように思えます。

### 4. 筑波の外で得られたもの

今まで話してきたこととやや逆説的になりますが、1970年代の当時、筑波の中だけに引きこもっていることは、座標軸の喪失を意味しました。人文・社会科学系の学生にとって、必要な資料や情報は、東京の図書館や他大学に行かないと入手できないことが往々にしてあったのです。また、大半の芸術系やスポーツ系のサークル活動では、東京に出ないと腕を試せるコンクールや試

合・大会が無いという状態でもありました。私たちは必要に迫られ、「東京を開拓」していったと言えます。学生にとって最大のネックは、東京とのアクセスの悪さでした。当時は、土浦や荒川沖までバスで40分、さらに朝夕以外は極端に本数の少ない常磐線に一時間以上乗らないと上野駅にすらつかないという状態が、心理的な壁となって立ちました。その壁を乗り越えることが出来たのは、やはり筑波に閉じこもってはいけないという、強い意識があったからだと思います。

筑波の外に出るということは、他大学の学生や研究者の方々と交流し、「生の情報」を得られることも意味しました。私の場合、中国の大学への留学を目指し、都内の中国語学校の夏季教室に通ったことがあります。そこで出会った他大学の学生達とは、奨学金留学生試験の受験対策や、中国の生活・研究環境に関する情報交換を行うことができました。また、奨学金留学生試験の試験科目の一つである中国語については、他大学の学生のレベルがいかに高いかを知ることができ、学習の意気込みも違ってきように思います。インターネットが発達した現在ですら、他大学の学生の中国語能力や留学生試験の準備状況などといった「生の情報」ばかりは、本人に会って直接入手するしか方法はありません。しょっちゅう東

京に出る筑波大生の多くは、こうした「生の情報」を得ることの大切さを、心底思い知っていたのではないのでしょうか。

また余談になりますが、企業アナリシスの仕事でも、案件の大小を問わず、出来る限り工場、店舗、その他対象企業の重要な事業資産を視察し、相手先から直接話を聞きます。これも、自分の眼で見、自分の耳で聞く「生の情報」を極めて重視しているからにはほかなりません。陳腐な言葉ではありますが、まさに「百聞は一見に如かず」ということなのだと思います。

筑波という土地は、大変中途半端な位置にあります。仙台や札幌まで行ってしまうと、地方の大都市なりに必要な情報へのアクセスが可能であり、大学や学術機関の集積もそれなりにあって交流もできます。しかし筑波の場合は、特に人文科学・社会科学の面でそれほどの集積はありません。どうしても東京に出てゆく必要があります。昔は東京に出た帰りに、常磐線の終電に間に合わず、上野公園で野宿するような「悲劇」もありました。今の筑波は、筑波エクスプレスも開通し、30年前に比べて格段に交通の便がよくなっています。筑波大生には、是非心置きなく積極的に筑波の外へ出てみるよう、お勧めしたいと思います。

(いいだ かずひこ／東洋史1984年卒)